

朝鮮資料覚書

——『捷解新語』の改訂——

安 田 章

一

まず、ここに記した朝鮮資料という名称について一言注釈を加える必要があるかと思う。実は、国語史研究の分野において、この朝鮮資料という通称が古くからあったわけではない。むしろその活用が比較的近年のことに属する関係で、また諺文で表わされた故もあり、同じ外国資料のキリシタンのそれほどポピュラーでないようである。現在の段階では、江戸時代、日鮮交渉の上で、朝鮮通信使との筆談集の類までに、その範囲は拡張されるに至っているけれども、私は、ここに言う朝鮮資料を、我が室町時代から江戸時代にかけて、かの国の司訳院を通じて刊行された日本語教科書というオーソドックスなものに、今のところ限定しておきたい、それら以外の文献については、別の処置——例えば、仮名諺文対音表などにおける因襲的要素の検討など——が必要ではないかと考える。

朝鮮資料覚書

周知の事実であるが、朝鮮における日本語教科書は「Maurice Courant の Bibliographie Coréenne (1894—96) 中、「『倭語類』」に二十一種のそれが記載されている。即ち、

伊路波・消息・書格・老乞大・童子教・雑語・本草・議論・鳩養物語・庭訓往来・応永記・雑筆・富士・捷解新語・改修捷解新語・重刊捷解新語・捷解新語文釈・倭語類解・長語・類解

であるが、右の内、今日実物に接し得るのは、僅かに『伊路波』『捷解新語』『重刊捷解新語』『捷解新語文釈』『倭語類解』の他、何故か Courant が日本語教科書とは看做していない『隣語大方』の六種を数えるのみである。右に記した内で『捷解新語』以前の、室町時代に刊行されたものは、今日殆んどその内容を知るべくもないけれども、教材として不完全であったようである。国語史の上で、口語資料としての朝鮮資料は、『捷解新語』を以って嚆矢とする。その刊行後二年目にして、先行の

一

十三種の語学書を廃せしめた事実を指摘するだけで、その語学書としての価値を十分に察知することが出来ようかと思う。この『捷解新語』の原刊本（以下「原刊本」と略称する）が訳官康遇聖によって編まれた十七世紀の前半からその刊行時（二六七六年）にかけては、いかなる時代区分の観点からしても、国語史の上での過渡期と言うことが出来るであろう。原刊本だけを取り上げたとしても、その資料的価値は、キリシタン資料について高く、独自のものを持つのであるが、朝鮮資料を——特に『捷解新語』の原刊本とその改訂本（『改修捷解新語』、ただし、実物としてはその重刊本である『重刊捷解新語』（一七八一）であるが。以下「改修本」と略称する）を高く評価しようとするのは、比喩的に朝鮮資料の「流れ」として述べたことであるけれども、語学書という、実用上での必要性から、一時期に偏するのではなく——つまり一語学書（群）に集約されるのではなく——長期間に亘って、かの過渡期の日本語を観察した点に存する。その結果として、具体的には、改訂の過程に多くのものを跡づけることが出来るはずである。もとより、同時代の他の資料に存する言語との対照的な総合的考察を経なければ、この特殊な資料に対する完全な理解は成立し得ないけれども、今後の布石として、問題点の指摘とでも言うべきものを記して置きたい。

二

改めて説くまでもないであろうが、『捷解新語』の内容は、

朝鮮における、日鮮両国の役人の交渉の対話及び、朝鮮通信使が来日した折の日鮮両国人の対話が大部分を占め、「国尽し」と書簡文の文例が巻末にある。それらの記載形式は書簡文を除いて、主として平仮名による日本語を本文として、各仮名に諺文によって発音を示し、更に朝鮮語を以って対訳するのである。そこに示された日本語は、全般的に中世末期から近世初期にかけての京都付近の話し言葉、それもむしろ俗な言葉を写しているようであり、また、仮名に振られた諺文は、日本語音韻史に貴重なものであるが、それらについては全て先学の研究に譲る。このテキストの改訂の、具体的な作業は日本人の協力を仰がなければならなかったけれども、その必要性を認識したのは朝鮮人であったようである。即ち、改修本の、李湛の手になる序は、この間の過程を余す所なく述べているので、左に掲げて置く。

隣国交接在於辭令。而辭令之要不越乎言語文字矣。然区壤廻隔風氣各殊。方言俗字不由講習則莫得以通解。此後學之有捷解新語也。粵在壬辰之難。院官康遇聖久被擄習熟其語言。帰成是書。用於科試。而歲月變久。語音差舛。与之（日本人のこと）酬酢。率多扞格而矛盾。逮至丁卯通信之行使臣承。朝命往質之。崔知叔鶴齡崔同根奉仁在行中。寔主其事。与倭人之護行者互相質難。逐段釐改。帰告于朝。令芸閣印布。而語音雖尺離正。倭諺大字猶仍旧本而未及改。其後崔知叔以公幹在萊州。又從通詞倭人博求大坂江戸間文字參互而攷証。凡点画偏傍之不合其字法者一皆正之。斯編始為

完書。仍以私力活字印行。其前後用心之勤。於是乎益著。而但書成既久。印本散逸。新學未免撤業。講試亦慮苟簡。乃者栢谷金相國十年提舉勸課有方。爰採衆論因所以広布而久伝。適金君亨禹願捐財鳩工摹活字而刊諸板藏之院閣用備後學印誦之資。相國之嘉惠是學亦豈偶然也哉。雖然伝曰能与人規矩不能使人巧。是書特資接館錄之酬答語耳。至若臨機以応変随遇而積難。存乎其人之折衷而斡旋之如何。此不佞所以深有望於業是字之諸君也。其字法語録源流之同異及同音各字通用之。凡例亦崔知枢所纂。而並付于卷端。讀者当自解之。不復贅焉。

「凡例」の第一・二条を併せて引用したい。

一、新語之刊行雖在肅朝丙辰。而編成則在 万曆戊午間。故彼我言語各有異同。不得不 筵粟改正。

一、彼語則古今廻異。使彼人讀之或有不知其為何語者。故就其中古今無別者略存之。余悉改正。所改者十之八九。

この、朝鮮人が「彼語則古今廻異」とした百年間における日本語の変遷は如何なる類のものであったか、その根柢にあるものについて、かつて一つの試案を提出した。ここに一々繰り返して述べないけれども、要するに、単に個別的な言葉の歴史的变化に抛るものでなく、言語生活の型とも言うべき、敬語法の表現体系の変化に、それを求めたのであった。まず型の交替を認め、それに付随した文体の精整統合を問題にし得るわけである。それを具体的には、折り目正しい武家階級の言葉の

方向への改訂を跡づけ得るのではないかと思われる。

しかし、全体の傾向として見れば、成程そのことは認められるけれども、個々の語の、乃至は個々の個所に焦点を合わせた場合、問題は依然として多く存するであろう。一体、語学書の改訂に際しては、多くのものがそこに籠められるはずである。態度としては、その言語を、それを母語とする者の立場により近く置く方向にあることは言うまでもないであろうが、形式として、体系的な整理、更に時流に適した変更などを指摘することが出来るであろう（内容に亘らなくても、「序文」「凡例」を追加するが如き、成書としての体裁を整えるための処置は当然考えられるはずであるが）。

「態度」は、過程として「与倭人之護行者互相質難」であつて、その諺文表記などに見える日本語化の方向は従来問題にされたところでもあり、今は触れない。形式的な整理は、まず、改修本における、節目の設定を掲げることが出来る。卷十を省略して左に示す。

- 卷一 与代官初相接 送使船間情
- 卷二 茶礼講定 茶礼問答 饌品器皿論難 封進物看品
- 卷三 下船宴問答 始行中盃礼 送使催答書
- 卷四 銅鐵看品停當 銅鐵看品 公木入給停當 公木入給
- 卷五 信使探候船 信使到馬島
- 卷六 信使与島主語 離馬島向江戸 島主請下陸歌
- 卷七 筑前主礼候信使 信使接江戸使 入江戸見閑白

卷八 信使不受金 信使還到大坂城 島主請信使饗宴
卷九 与代官相約振舞 和語謙讚 日本各道州郡

その中で、話し手を「主」「客」と明示するものやはり整備であろう。原刊本巻一26才以後を巻二に、また、巻三28ウ以後を巻四にと、内容の関連性を重視して、改修本で別巻に移したことも、更には、省略の或る箇所は、この、節を設けたことによる精整統合と言えるはずである。

よがいりまるしたほどに、まづ御しゆひとつこしめし。けいで御ざるほどにゆるさしられ。……そなたことばがつしまにてききおようたやうに、ようつうじまるするめてたう御ざる。……さけおばもおかしられ。あまりいやとおしらすほどに、まづとりまるせう(一17ウ、20才)(原本の音註に従い濁点を施した。)は、「和語謙讚」や「茶礼問答」に統合したものであろうし、「公木」について述べた箇所、

こும்くわそくかすが御ざるほどに(三23才)……まづこும்くおいてくだされたらば、さきいくふねに、やりまるせうかとおもいまるする……かれこれ申まるして、なんぼうしつこும்わしられうとぞんじまるする(三25才、26ウ)も、「公木入給停当」以下に統一されたと思われる。この種の整理は、場面の限定乃至は規定によるものと言えるはずであるが、その「場面」は、日本人との交渉において、当然予想される類のものであった。それが、言わば「規矩」(序)なのである。それも、「公」の場におけるものであり、「私」の場での「規

矩」などはあるはずもないことは言うまでもないだろう。

しかし、巻五の後半の十張に及ぶ省略は、単なる統合などでは考えられないのである。かつて述べたように、改訂の契機の一つは、敬語法の展開によるものであったと思われる。結果として、それは、言葉の「折り目正しさ」に象徴されるのであるが、より高い次元に立つ時、言葉の問題は、場面のそれに連続して行くはずである。言葉の品格が論じられるのは勿論であるが、やはり場に対する意識、即ち晴・褻の取捨選択があったと見たい。省略箇所に対して、当時の言語生活での、晴・褻、即ち公・私の意識の振幅による検討が、一方において、なされたのではないかと思われる。「倭語謙讚」は、この種の実用書の範囲内で許されるにしても、公の場に付随した挿話などは、それを康遇聖が実際に体験したことであり、原刊本にあったとしても、省略されたものが目立つのである。

それにつきとしよたははおもちまるしたに、てうせんのかくおかべこしなからききたいとのぞみで御ざるほどに、かくつかまつるものお、のこらずつれさしらるやうにたのみあげまるせう(八23ウ、24ウ)あのめづらしいはやしおも、ははちやものきかれてことごとしゆめづらしがつてよろこぶと申ほどに……ありがたうこそころゑまるする(八27)は、その例であろう。このように考えると、省略には、量的な統合と質的な省略と、二面があることになるはずである。

かつて、亀井孝氏は、原刊本の「りもんぢ」(九5ウ)の前後

のくだりが省かれたことに關して、示唆に富んだ発言をされたことがある。④単に「悋氣」を意味する言葉が中にあるというよりも、もっと広いもの、即ち、会話の場での「折り目正しさ」を意図したために省略された、私は考えたいのである。かの公的な節目は、形式的な設定であろうが、それ以前の意識こそ問題にすべきかと思う。褻の場に関しては、改訂の推進者崔鶴齡の弟、崔麒麟の手になる『隣語大方』が、後年刊行されたことも無関係ではあり得ないはずである。

かく考え来ると、この種の省略箇所は、やはり大きい比重で、改訂の根本態度と係りを持つのである。私は「如在」などを取り上げ、その言葉が改修本で姿を没したことについて、俗語性にその理由が求められはしないかと疑ったが、より高い次元で処理されねばならないことになる。一語一語の、置換の問題ではなく——そのような言葉もあるが——、それを用いるに至る場に焦点を合わさねばならないはずである。これは、朝鮮における一語学書の問題に限定されずに、当時の言語生活での「規矩性」とでも言い得る意識に連なっていくのではなからうか。即ち、先に述べた質的省略は、まさに、この、場以前の表現内容の品格、更には表現態度のそれを含みはしないかと思う。

これわちがわたくしに申ことばちやが(一三1ウ)

じぎにみて申ことがおおけれども、このあいだいぢえんこちえわ御ざらんほどに、きやうさんにきよくもなし、はらがたちまるする(一三12)

を改修本で省略したことは、発言者の態度に係わるものと見たいのである。省略箇所は、一語一語に關連した個々の問題以上に、奥深いものを持っていそうである。

一方、文体の整備に伴なう部分的な省略は、

われわれくには↓われわれのくになわ

御めにかからんお↓御めにかからぬこと

の、いわば「片言直し」に比すべき類と言えるであろう。つまり、それら自体日本語に相違はないけれども、日本語としての未熟さの訂正に伴なう省略なのであった。いささか長文であるが、原刊本・改修本を対比して見たい。

こころえまるしたそうしまるせう。ただししやうぐわんじそうしてやまいけなひとで御ざたに、なとやらくるといなるほどに、いでまるするまいかとおもいまるするほどに、われらばかりいでまるせう。

そうならばなせにせひともあすさしらるやうにおしらりたか。しやうぐわんじのきあいもぞんぜず、そさえさしあいないやうに申てあすさだめに、いまになてしやうぐわんじのきあいとおしらるほどに、しやうぐわんじいでられずば、われらむてうはうわ申わけられんほどに、たとえしやうぐわんじ御きあいに御ざるとも、されいわそつとのまちやほどに、いでさしられてけにもたえられずば、さきに御たちなさるとも、われらめいわくおほうじさしられかな。

おしらるところそうなれども、しやうぐわんじさくばんよ
りわづらいついたほどに、こなたゑかざねて申まもなさに、
そうてわ御ざるが、こりがかどやまいでわなし、しやうぐ
わんきしよくが、かんにんなるべきほどならば、まかりい
でたいとこそぞんじられども、とねぎかしらりても、か
どやまいとわおぼしめすまいほどに、こなたのむてうはう
にわ御ざりそむなうこそ御ざり。

これわこちがわたくしに申ことはちやが、こなたしゆもか
がゑて御らんじられ、きやくしんかきてこそ、ていしゆが
みまるするまいか。

そうなれどもそこできもいて、このやうなたうりおとねぎ
ゑ申て、あすぜひともしらるやうにさしられ。(原刊本
一27才〜32ウ)

客 ころゑましたそうしませうけれども、しやうぐわん
わもとびやうしんなひとて御ざりますに、なにといたさ
れたやらちやくみぎりより、またいたみまして、しゆつき
んいたしゑられますまいかとぞんじまするほどに、わた
くしばかりまかりませう。

主 さやう御ざらばなぜにはやうするやうにおおせられま
したか。しやうぐわんじが御いでなされねば、われわれの
ぶてうはうわ申わけが御ざらぬにより、御いでなされまし
てまことにこたゑかたう御ざらば、さきに御たちなされ
も、われわれのなんぎにならぬやうにさつしやれい。

客 これがさくびやうてわ御ざらぬにより、とうらいさま
御ききなされても、そこもとのあやまりにわなりますま
いかとぞんじまするほどに、みやうにちかならずなります
るやうになされませい。(改修本二2ウ〜5ウ)

傍線部分が、実は、改修本と対照し得ない個所なのである。
右の引用で、先に触れたところの、単なる「片言直し」以上の
改訂・省略部分も含まれているが、原刊本・改修本の性格が各
々ほぼ描き出されているはずである。つまり、近代敬語法の象
徴とも言うべき「ござりまする」は見られないけれども、そ
れを措くと、話し言葉を文字に置き換える場合の両極端を示す
と言えはしないか。改修本は、その一方の書き言葉的な話し言
葉になつていと思われる。その態度は、

みきに申たおくれふねお、御ねんおいらきてきもいらしられ
(一21才)

またおしられんてもちよさい御ざるまい(一21ウ)
の省略に見るが如き、話線の上での繰り返しをも、また、相手
の言葉をそのまま受け止めた停滞をも、もとより認めない方向
に基本的に通ずるのであらう。

ことに、みぎに申やうに、いまほどくにくにより、さたの
かぎりもないとき(四20才)

おしらるやうに、てんきもあらさいんでこれまでまいたは
どに、いまこそあんどうござる(五19才)

そうおしられそうなことおぞんじて、しんすゑ申さんさき

にいろいろにしんしやく申たれども(六17オ)

みぎの御ことわりおきくからこう申ことお、さだめてきも
つかんやうにおぼしめそうすれども……かやうにこそ申ま
する(八6ウ~7ウ)

など、一々は挙げない。要するに、「省略」も、改訂の根本に
連なる類のものであり、単なる量的な配慮はむしろ少いと見て
置きたいのである。

勿論時流に則した省略・改訂もあるであろう。大坂城改築の
くだりが、省略されて、代りに、

ここともゑしごにちとうりうつかまつり、きうそくつつかま
つるやうにとの御ことかしこまりまして御ざります(八
12オ)

が置かれていのもそれに属するであろう。これは逆に増補に
も連なるわけであるが、

たいくわんしゆはうゑしよかんおもつて申わ、さきほとと
うみよりあんない申まするわ、おきにふねがみゆると申ま
するにより(一12オ)

を追加したのは、原刊本の書簡文の

ただいま、とうめのあんないに、にほんふねにそう、まい
り申候よし(十18オ)

の干渉があるであろう。一々の語句の追加には恣意的なものがあるのは当然であろうが、巻七の後半即ち第十五張(改修本)以下は、部分的に対照し得る箇所もあるが、殆んど改修本にし

が見られない。それは、「客入江戸見聞白」という主題に即した増補であり、その裏返しとして、原刊本についての省略には

違いないけれども、序の「逐段釐改」が思い合わされる。語句を追った末での改訂というよりも、逆の、節目を設けた上での

それであって、従って、ここに改訂態度と手順との明確な区分を知ることが出来るはずである。そこで、日本人の関与は今更

言うまでもないけれども、省略部分に対する意識、そして、それと対になる増補部分に特に現われているのではないかと思う。つまり、改修本で「新出」した箇所、

このたびわはるばる御とかいなされまして、しよじとこ
おりなう御すめなされて、御きこくにおよびまするにより、
かやうなたかうなぎわ御ざりませぬ(八25ウ)

の言葉の選ばれ方など検討の余地がありはしないか。例えば、原刊本に見られたように、「すむ」(二段活用)・「すます」が同義語の関係にあったはずであるが、改修本では全て前者に統一されているが如きは、単に語性によらないはずの、日本人の同義語における選択意識に溯らねばならないであろう。

三

個々の語の置換については、かつて触れた点もあり、今一々は繰り返さない。ただ、左に、省略箇所がなく、一々の語がそれぞれ対応している例を掲げるとどめる。そこで各語を対照せしめれば大凡の見当がつくであろう。

くうぎのことなれば、こうぎのことなれば、

かなわずせわ やむことおゑずせわ

し申たに、 しよう申ましたれば、

御かつてんにぞんじら 御かつてんざさしや

れてようす れてようしうあいす

みまるしたほども、 みまして、ちんちや

めでたうこそ御ざれ うにぞんじまする

(原刊本 四4オ) (改修本 四6オ)

さて、言葉の入れ替えについて、先に触れた「俗語」に関連

した「いかう」を手がかりに少しく述べてみたい。この語は、

中世末期から近世初期にかけて、その口語としての地位を占め

るに至つたものであろう。『増補俚言集覧』では次のように記す。

いかう 俗語也甚の意にいへり茂字より転したる詞成へし

又厳くの音便ヒドウ、キツウ又イカウ沢山にあるイカウギ

ヤウサンなどのいかうなり

もとより「俗語」などはっきりした定義などされるはずはない。

同書に見える「俗語」を二三示すと、「あげく」(結句と同意に

てあげくのはてなどいへり)「あたぶがわるい」「あはよくば」「開

合」(詞の開合がヨイワロイといふ)など漠然たる方向しか指さな

い。つまり、

The common, or vulgar dialect, such as is spoken
by the common people; not the learned, elegant or
refined language of scholars.

という J. C. Hepburn の『和英語林集成』(一八六七年)の極

めて常識的な説明程度のことなのである。「いかう」は『日葡辞

書』には記載されていないけれども(ただし Icaí はあるが、その

副詞形は見えない)、耶蘇会板には、それぞれ、

或る鳥とつと肥えた鳩を見ていかう羨しう思うて(『伊曾保

物語』)

篠原での合戦には双方いかう死んだなう。おゝなかなか、

源平ともいにかう討たれたと聞えまらした。(『平家物語』

卷三ノ第四)

龍の水を得るが如し。心。いかう達者ぢや。(『金句集』一

六一則)

など見え、虎清本狂言(「文になみ」)でも拾える。『捷解新語』

では、原刊本を中心に見ると、

A 改修本で、原刊本の当該個所の省略に伴い、姿を消し

たもの……三例

B 改修本にそのまま移行されたもの……七例

C 改修本で別の言葉に替えられたもの……一例(「ずいぶ

んに)

であり、逆に、改修本「いかう」に焦点を合わせると、

A' 原刊本に対応すべき語なく、現われたもの……一例

(七例)

B' 原刊本のまま受けつゝもの……七例

C' 原刊本の他の語から替わつたもの……四例(「いかにも」)

「いちだん」「ぎやうさん」「このほか」から

と分けられる。C'の五語で、他の動きを示すと(書簡文は除く。また、改修本で前後のくだりの省略に伴って姿を消したものを省略する)。

いかにも ↓はなはだ

ぎやうさん↓おびたたしう・きびしう

ことのほか↓ことのほか

ずいぶん ↓ずいぶん・せいだして

となる。「いちだん」は、結果として、書簡文にしか残存しないのである。

一方、それらに対訳せられた朝鮮語は、「いかう」「いかに」も「いちだん」「ぎやうさん」「きびしう」「ずいぶん」「はなはだ」には *ke-caŋ* が、また「おびたたしう」「このほか」に *ke-mi-ti* (又は *ke-mi-ŋ*) が、また「せいだして」には *hin-ŋso* が当てられている。故に、日本語の入れ替えて朝鮮語にも変更を見たのは、「ことのほか」を「いかう」に、「ぎやうさん」を「おびたたしう」に替えた場合に止まる。

更に、*ke-caŋ* に当たる日本語は、「ぢやうに」(原刊本三二七ウ)「ひとしゆ」(原刊本六五ウ)「ひとしお」(改修本六六ウ)を挙げることが出来るし、*ke-mi-ti* に「おおくらましう」(改修本一八〇ウ)を比することが出来る。この内、差し替えのあったものは、

ぢやうに↓たんと・よけいに

たいせつかましう↓おおくらましう

であり、朝鮮語も替えられている。また、「たんと」「よけいに」の朝鮮語 *taen-ton* に関連して、「おおう」(多)が問題になる。かくて、「いかう」を廻って少くとも右に取り上げた語の位置づけを考慮しなければならぬであろう。即ち、ここに同義語乃至は類義語間における張り合い関係を、一『捷解新語』に限定されずに、同時代の他の国内文献に存するそれらとの対照的な考察を経て、明らかにする必要がある。しかしその作業の前段階として、『捷解新語』の持つ意味乃至は背景から因って来たところの性質と、そこに存する言葉との有機的な関係を瞥見して置きたいのである。

同義語とか類義語とか言いほしたが、もとよりコンテクストに絡むことは勿論である。先の「きびしう」をここに挙げれば十分であろう。しかも、一般的に交替の激しい、つまり意味の通減のある副詞であるだけに、張り合い関係の手がかりにすべき改訂の理由づけは、かの態度と直線的には結びつかない面もあるはずである。「いかう」に置き替えられた言葉の内、「いちだん」「このほか」などは卷十の書面文にも出ているが、「折り目正しき」という点なら、改められる理由はないことになる。他に、コンテクストとの調和も考えねばならないであろう。しかも、素性の正しい語はよい語、品のある語と考えられ、文章語系統の語、漢語、古風な語は品のある語になり得るにしても、問題は雅俗の規範意識と現実的な具体性との兼ね合いで

あろう。ましてやこの種の語学書においては。即ち、それが雅語であり、従って品格に富もうとも、現実の口語でないならば、かかる実用書では無意味に等しいことになる。「折り目正しき」を大きな枠として、その中の動きが問題になるはずである。

『物類称呼』（岩波文庫本による）に、

○多いと云事を○たんと○ぜう○だいぶん○たくさんなど
いふ時は関西関東共に通称なり（巻之五）

とあるが、この内「ぜう」（原刊本で「ぢやうに」）は「ぎやうさん」と共に、『片言』で問題にされている。

ぎやうさんしきとは ○業々敷とかくなれば○ぎやうさん
とは業山とは書侍るべき敷

じやうにといへるは○物のおほきかた地敷。上文字成べし
といふ人も侍り。但重畳の心にて。畳の文字にや

実用書の範囲内で、常に斬新な表現を要求する程度副詞において、現実の問題として、品格語に固執し得ないけれども、その場合、改訂の過程で、語形として如何しきものを入れ替えたことも考えられはしないかと思う。規範についての記述を容認したとしても、個々の作品を検算し、全体を推し量ることは容易ではあるまい。かくて、原刊本・改修本を並べる時、たとい日常の身近な言葉でも、その選択態度を探り出せるはずである。それは、「俗」の中における枠づけになり、必ずしも改修本の根本態度と矛盾しないのである。つまり、規範性と具体性との更には理想主義と現実主義との調和と言えるであろう。この副

詞（乃至は副詞的修飾語）のグループに、特に二元性を認めることが出来るであろう。

「たんと」の、規範意識の一つの拠り所となる素性や語源が何であれ、その撥音を含む形は、新鮮な表現効果を齎したことであろう。それが改修本にあることも、単なる雅俗の意識とは別に、つまり、全体の方向を認めた上で、当該文体に適したものと少くとも考えられたかも知れない。「たんと」は全て「客」の発言に属するのである。主・客、そのいづれか判断に苦しむ場合も少くないけれども、「客」は日本人と理解してよいようである。即ち、当時の極めて有り触れた言葉を、その話し手に使用せしめたと考えられはしないか。同様に、地域性を帯びた「おおくらましう」も、その使用者が「客」であり、機能としては副詞的修飾語であることに解釈を求めべきかも知れない。漢鮮日辞書『倭語類解』の刊行以前としては、改修本である程度の日本語を理解しなければならなかったはずであるから、最少限のバラエティも必要であったろう。その際、素性などに固執すべくもないわけであるから、語形、表記相が一つの規範になる可能性を考えたいのである。

述べてここに至れば、「いかう」が、たとい「俗語」と言われる当代語であったとしても、それならばそれだけ、本書では十分にその位置を得たのも理解出来る。つまり語形に関して正しく、素性についても「厳し」の連用形と理解されて（それが、真に正鶴を得たものかは今後検討を要するであろうが）、しかも程

度副詞であることも理由になるはずである。

「俗語」そのものの定義がなされる状態でなく、「俗語」観「俗語」の研究は未開拓の分野と言つてよいであろう。その作業は容易ではなからうが、まず現われる可能性の強い副詞を手がかりにして、全体に及ぼせはしないかと予想している。その際の、国内文献での検討の前駆として、朝鮮資料は十分役立つのではないかと思われる。

註

- ① この六種は、それぞれ解説を付して、複製刊行された。即ち、『伊路波』は、昭和三十四年五月、香川大学から開学十周年記念出版として、他は、昭和三十二年から三十八年にかけて、京都大学文学部国語学国文学研究室から刊行された。
- ② 例えば、浜田敦「捷解新語とその改修本―「日本」と「看品」―」(『国文学』第三十号)。
- ③ キリシタンは、日本語の通俗平易な会話書を持っていたようである。今日、それらを完本の形では見ることが出来ないけれども、ロドリゲスの『日本大文典』や『日葡辞書』に引用された逸文によって、その断片を知ることが出来る。土井忠生博士が「吉利支丹文献考」(『養方バウロの「物語」』)に引かれるのを一見しても、似通つた文例を見出すことが容易である。
- ④ 『国語学』(第三二輯 一四〇頁)。
- ⑤ 「いかう」は、「いかいごと」のごとき派生形を生み出したが、『東海道中膝栗毛』にも見え、江戸時代を通じて用いられたようである。Heppurn の『和英語林集成』の、初版本(一八六七年)に

朝鮮資料覚書

は見えないけれども、第二版(一八七二年)本には、

IKO, *イカウ*, *adu*, *very*, *exceedingly*, (*a provincialism*),
— *wari*, *very bad* — *yoroshū*, *very good*.

Syn. HANAHADA.

u (provincialism は「ナマリ」「カタコト」と「英和」で註してある)。VERY や EXCEEDINGLY に対する日本語として、IKO は見えない。副詞を処理する場合、個人差、世代差が考慮されねばならないが、少くとも、「死語」ではなかったのである。それに対して、「イカイ」は初版・第二版本とも、*great*, *big*; *much* を配する。

⑥ 『倭語類解』では、*ke-cag* に当たるものは、「最」に対する「イロウ」だけである。*ke-rū-ki* は同書には見えない。

⑦ 『日葡辞書』では、それぞれ次のように説明されている。

Cotonofoca. *Grandemente*.

Fanafada. *Adu*, *Grandemente*.

Fioxiuo. *Adu*, *Muito*, *ou* *particularmete*.

Guōsanni. *Grande*, *ou* *encarecidamente*.

Icanimo. *Muito*.

Ichidan. *Adu*, *Fitoqire* *Muito*, *ou* *grandemente*; *serve*

pera *lanuar*, *abaixar*, *ou* *abater*.

Ōni. *Adu*, *Muito* *encantidade*.

Tanto. *Adu*, *Muito* *em* *quantidade*.

Zaubun. *Adu*, *Bem*, *com* *cuidado*, *excelentemente*

副詞形としてだけ見え、語釈のないのは省略した。*は補遺に見えるもの。これらはいずれも江戸時代を通じて用いられたようである。

り、改修本での置き替えには、意味の通減はあるにせよ、使われなくなっていたという理由だけでは説明しがたいはずである。

⑧ やはり『片言』（巻一）には次のような記述がある。

そのうちには久しう御めにかゝりまいらせぬといふべきを。其以後は御意を得ず。中絶いたし。疎遠の至り無音千万本意を背き所存の外にて侍るなどいふ挨拶は。悉皆文章を聞侍るやうにて。いと冷じう。若き人などにはとりわきよろしからず。乍去かうやうの言葉はその云人からによるべし。世に物しりといはるゝ人か。さらずは出家かくすしなどこそ似つかはしかるべけれと云り（日本古典全集本による）。

⑨ 山崎久之『国語待遇表現体系の研究』（八〇六頁）参照。

⑩ 『増俚言集覧』には、

多きを云谷となるべし沢山と云が如しと云り又足ぬといふ事也と云説あり〔諺草〕姜維斗胆を引て合俗胆斗と云大なる事を云はゞ可ならん歟、愚按、此説非也。

『和英語林集成』には、

this word is probably derived from the Spanish.
とある。Heburn は Coll. (ソック) と註する。

⑪ 大浦政臣「対馬北端方言集(一)」（『方言』第二巻第二号）に「仰山な、針小棒大な」として「オホクラマシイ」を記載する。山口麻太郎『老岐島方言集』に「仰山らしい」として「おークラマシカ」を記す。江戸時代にもやはり方言として限定されていたのかは断定しがたいけれども。

⑫ 例えば、「一向」との関係なども考慮すべきであろう。ロドリゲスでは八頁に引用した天草本平家物語の *Io* を *lco* と誤るのであるが。

〔付記〕『捷解新語』の改訂は、更に『捷解新語文釈』（一七九六年）があつた。平仮名主体の本文を、漢字仮名まじりのそれに直した一わけだが、この一種の表記論的処置は、別稿に譲ることにした。

（三九、九、二九）